

中尾本『おくの細道』の用字特性（下の一）

濱 森太郎

一 承前

一七四カ所の本文訂正、八カ所の本文脱落、四七カ所の漢字・仮名の相違が検出される中尾本『おくの細道』には、さらに六八五字の仮名字体の相違がある。その中でも、同書の下地本文で頻出する「す（春）・と（登）・に（丹）・る（流）」の四文字三一〇例（45％）の異体仮名は、中尾本筆者による貼紙修正作業の進行につれて大きく減少する。

加えて下地本文に集中する異体仮名の「春・登・丹・流」には、くずし、筆運びともに個性的なハネや打ち込みの痕跡が認められる。正書体の文字の輪郭を手早く再現するときに生じる省筆型のハネや打ち込みである。これらの恣意的な仮名文字遣い並びに筆跡の個性が「中尾本」下地本文の用字特性の正体であり、それはまた元禄六年当時の松尾芭蕉の筆跡には希なものである。

下地本文に顕著なこの用字差、修辭差、字体差、くずし差、運筆差を持つ筆者名は、いまだ特定されてはいない。しかし幸いなことに元禄六年四月末に江戸で執筆された松尾芭蕉筆「許六離別詞」〔芭蕉全図譜〕所収、岩波書店刊の筆跡が中尾本『おくの細道』の筆跡に近似する。これが事実なら、中尾本『おくの細道』が松尾芭蕉によって元禄六年に執筆されたことを裏付ける証拠になる。

そこで用字分析の手法を用いて、この両者の用字差、修辭差、字体差、

くずし差、運筆差を比較し、執筆時期並びに筆者を絞り込む手がかりを抽出してみたい。それにはまず「許六離別詞」の原形に遡り、次に「許六離別詞」の筆跡が中尾本『おくの細道』の筆跡に著しく近似することを証明する必要がある。

二 「許六離別詞」の校異

さて「芭蕉紀行文文字データベース」〔注〕を用いて、「中尾本」下地本文に近似した芭蕉自筆の文書を検索すると、文字遣いが近似した文書が一点だけ検出される。元禄六年四月末、江戸勤番を終了して彦根に帰する森川許六の送別用に書かれた「許六離別詞」〔図版1。原本所在不明、『芭蕉全図譜』岩波書店刊。以下「全図譜版」と略す〕である。「柴門ノ辞」とも呼ばれる名文で、他に数種の写本がある。

元禄六年五月六日に松尾芭蕉から「許六離別詞」を受領して彦根藩に帰任した森川許六は、帰任後、直ちに江戸の松尾芭蕉に返礼の意を込めて帰路の旅行記『癸酉記行』（自筆卷子本〔注〕）を書き送ったが、今取り上げる「許六離別詞」は、その『癸酉記行』の中に記入される形でまず開示された。すなわちこの時、芭蕉自筆版の他に癸酉記行版「許六離別詞」が生成したのである。

次に、元禄七年十月の松尾芭蕉没後、芭蕉庵二世を継承せんと思ひ計つ

た森川許六が自派の威勢を示すべく出版した『韻塞』（元禄九年刊、許六・李由編）の中で、ふた度、この「許六離別詞」の芭蕉自筆版を模刻して公表する。この韻塞版によって初めて、松尾芭蕉筆「許六離別詞」は広く一般読者の目に触れる作品となる。

当然、この両書の字面を比較すると、語句、字体、筆運びの特徴にはかなり緊密な一致が見られる。森川許六は私意を押さえて、丁寧に「許六離別詞」を模写したのである（図版1/2参照）。

ただし、次の表1の通り、この韻塞版と癸酉記行版とを比較すると、癸酉記行版には極微少なながら清書者許六の判断が加わった痕跡が次の四箇所に残されている。

- 1、「画↓畫」
- 2、「画↓繪」
- 4、「用一なる↓用ひとつなる」
- 8、「筆の道も見え↓筆の道にも見え」

1、2は、単調に繰り返される「画」を「畫・繪」というバリエーションに富んだ字面に書き換えたものの、4は「用一なる」「用一なる」といった類似の読みを予防したもの、8は「筆の道・も見え」とあった脱字「に」を補入したものである。いずれも編集上の手直しの域に属する軽微な修正に当たる。

次にこの両書の語句、字体の特徴を全図譜版「許六離別詞」と比較すると、全図譜版「許六離別詞」の語句にも、若干の食い違いがある。

表1 韻塞版と全図譜版との比較

	韻塞版↓	癸酉記行↓	全図譜版
1	画を好↓	畫を好む↓	畫を好
2	別をおしむ↓	別をおしむ↓	別ををしむ

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
風羅坊芭蕉述↓	筆の道・も見え↓	うしなふる事↓	ミことは越↓	冬扇のとし↓	精神徹に入↓	用一なる事↓	画の為愛・と↓	何・為愛すや↓	画の為↓	とふ事あり↓
風羅坊芭蕉述↓	筆の道にも見え↓	うしなふる事↓	ミことはを↓	冬扇の古とし↓	精神徹に入↓	用ひとつなる事↓	繪の為愛すと↓	何の為愛すや↓	繪の為↓	とふ事有↓
風羅坊芭蕉	筆の道に見え	うしなふ事	ミことはを	冬扇のこ登し	精神妙に入	用一なる事	畫の為愛すと	何の為愛すや	畫の為	とふ事有

今、『韻塞』並びに『癸酉記行』所収の本文を基準として、全図譜版

「許六離別詞」の異同の意味を考察すると、1「画を好↓畫を好（全図譜）」、4「画の為↓畫の為（全図譜）」、5「何・為愛すや↓何の為愛す（全図譜）」、6「画の為愛・と↓畫の為愛すと（全図譜）」、いずれも脱字を補い、前後の同一語句に合わせて表記を揃えたものである。

また1は、実は「繪を好、風雅を愛す」という対句構成であり、その点に注意すると「繪を好ミ」と読むべきだろう。それが「好ミ」（韻塞）、「好む」（癸酉記行）と二様に書かれるのは、許六が手控えにする松尾芭蕉自筆の原懷紙が「画を好、風雅を愛す」とあり、これを公表する森川許六にも送り仮名を補填する必要があったからだろう。

同じく3「画の為↓畫の為」は新旧の字体の相違を旧字体揃えたもの、また5の「画の為愛・↓畫の為愛す」は、「愛」に送り仮名を追加して読みやすく補正したもので、これに先立つ「風雅を愛す」という動詞に揃えて活用語尾を追加したものである。

同じく8「精神徹に入」が「精神妙に入」「精神微に入」と二様に読ま

れている。その原因は、この語句が「精神徹に入、筆端妙をふるふ」と対句を成すことにあり、このためうっかり読めば、「徹」と「妙」とが対を成しやすい。恐らくは原懐紙の「徹」が難読の筆跡である上、後続の語句に当たる「徹」と「妙」とが対をなすことが「徹」の判読を生み出す理由だろう。なおこれはこの文書の編集を任されていた森川許六の判定であり、かつこれが定稿として芭蕉に書き送られた後、特に改訂の指示を受けなかった経緯に照らすと、「徹」を定稿と見なす見方も成り立つ。もし森川許六が所持する芭蕉自筆の原懐紙が全図譜版のように「妙」と傍書されていたなら、許六が「徹」と読むことは無かつただろう（図版3参照）。

次に10の「ミことは」は、原懐紙に「ミことば」とあったものか。韻塞版、癸酉記行版では「のみ」二例が「のミ」とあるように、原懐紙の「ミ」は平仮名感覚で使われている。また「好ム」（韻塞）の例のように、送り仮名の補足にはカタカナを用いて原文と補筆とを区別する丁寧な編集者森川許六なら、できれば「ミことは」とは書きたくなかつただろう。また全図譜版のように、原懐紙に「ミことはを力として」と傍書されていたなら、許六は喜んで「御ことはを力として」と書くに相違ない。

11「うしなふる事なかれ」は「る事な」の草体が三字ともに「る」と近似して錯誤の種となるが、実際の書面に当たるとその可能性は少ない（図版1/2参照）。補正の手が加わった癸酉記行版でも修正がないところを見ると、許六が持ち帰った原懐紙では活用語尾を「うしなふる事」と書いていたものだろう。その「うしなふる事」が全図譜版で「うしなふ事」と訂正されたのである（注3）。

12「筆の道・も見え↓筆の道にも見え↓筆の道に見え（全図譜）」は、全図譜版で書写の拍子に生じた「も」の脱落を、気付いて傍書したものか。おそらく江戸から持ち帰った芭蕉自筆の原懐紙でも、「に」の脱落

があったものと推測される。

以上要するに、全図譜版には補筆して前後の同一語句と文字を揃えた次の事例があること、

- 5、何・為愛すや↓何の為愛すや（全図譜）
- 6、画の為愛・と↓畫の為愛すと（全図譜）
- 11、うしなふる事↓うしなふる事↓うしなふ事（全図譜）

また、次の三箇所傍書修正が韻塞版、癸酉記行版に踏襲されていないこと、

- 8、精神徹に入↓精神徹に入↓精神妙に入（全図譜）
- 10、ミことは越↓ミことはを↓ミことはを（全図譜）
- 12、筆の道・も見え↓筆の道にも見え↓筆の道に見え（全図譜）

この点から見て、全図譜版が韻塞版及び癸酉記行版の下書きになった芭蕉自筆懐紙だったとは考えがたい（注4）。全図譜版は明らかに韻塞版及び癸酉記行版の後に書かれているのである。

最後に13の署名「風羅坊芭蕉述」は珍しい署名で、韻塞版、癸酉記行版に共に署名に「述」がある。恐らくこの「述」は原懐紙に有ったものだろう。しかし芭蕉自筆とされている全図譜版ではその署名の「述」と「風羅」「鳳尾」という落款とが欠けている。落款を削除する裁断は文書の信憑性を損なうために、この懐紙から落款が削除されたとは考えがたい。

一般に短冊・懐紙上の署名行為は文章、文字ともに署名者のものであることを保証するもので、松尾芭蕉もその例外ではない。大方の懐紙、短冊では「芭蕉」「はせを」など、簡素な署名が用いられる。

ただしそれが自筆である事をやや強く確認する場合、松尾芭蕉は、極たまに『続の原』（貞享五年刊）の署名「桃青書」、また「机の銘」（芭蕉庵小文庫、元禄五年成立か）末尾の奥書「応蘭子求」「元禄仲冬 芭蕉書」、「東順伝」（元禄六年九月作）冒頭の「東順伝芭蕉稿」のように「書」ま

たは「稿」を追加することがある（注5）。

一方、「風羅坊芭蕉述」の「述」の原義は、『字通』（白川静、平凡社刊）では、「〔説文〕^三」「循^{した}ふなり」、「〔論語、述而〕」「述べて作らず」を（墨子、非儒）に「循^{した}べて作らず」とする」とある。すなわち「述」は「循」に通じ、「循」ことを意味する。我が国では、荻生徂徠の『譯文筌蹄初編』（十一上）に「述、人之言ヲソノマ、言フヲモ、又人ノナシタル事ヲウケツギテスルヲモ言フ。」とある。

さらに芭蕉一門の「述」には、次の用例がある。

1、故翁羽黒参籠之日、露丸子聞書、又ハ遠山子同座ノ物語ヲ記ス。

土田竹童述（『聞書七日草』識語）

2、再呈落柿舎先生 梧右下 小子許六謹述（『俳諧問答』）

1は、松尾芭蕉の羽黒参籠時（元禄二年六月三日）に同座した出羽の俳人、露丸子の聞書、その他を土田竹童が代理して祖述する語句、2は、去来・許六の応答を記した『俳諧問答』の版行に当たって、編者森川許六が図書の意図を語る前口上である。

自分たちを「孔門十哲」に準える芭蕉一門の署名習慣の中では、『論語』『述而』の「述べて作らず」は典拠としての意味を持つ。「風羅坊芭蕉述」は、風羅坊芭蕉の陳述または作述を意味する。やや幅広く蕉門の俳書を探索すると、早くは貞享元年刊宝井其角編『蠹集』の「蠹集序 倉閭蘇鐵林千春述」、森川許六編『本朝文選』の「本朝文選序 月沢律師李由述」のように、版本の序などにたまにこの署名が見られる。

ちなみに、「許六離別詞」と同時に松尾芭蕉から森川許六に贈られた「送別懷紙」では韻塞版、癸酉紀行版ともに署名は「はせを」とあり、「述」の字はない。要するに、元禄六年五月六日に松尾芭蕉から森川許六に送られた句文懷紙「許六離別詞」は、文字どおりの口述筆記または作

述であった。このために許六が保有し得た原懷紙は、松尾芭蕉筆の草稿だったことになる。当然、公表に際して必要になる書面のレイアウト並びに文字遣いの細部は、森川許六に委嘱されていたことになる（後述）。

三 「許六離別詞」の用字法の概観

ところで、元禄六年五月六日に江戸を出発した森川許六は、約七日間で彦根に帰着すると、五月一五日には『癸酉記行』の奥付を書いている。この度、彼がこの『癸酉記行』の完成を急ぐのは、これを江戸に送付して、松尾芭蕉の旅懷を温めるためである。

森川許六の江戸出立を間近に控えた元禄六年三月、労咳を病む猶子「桃印」の看病に忙殺されていた松尾芭蕉は、「急ニハ事終申まじく候か。」と桃印の末期の時期を思い計り、森川許六には「いまだいつ頃御見舞共難定候間、左様ニ御意得成被下候」（同月、許六宛芭蕉書簡）と書き伝えていた。松尾芭蕉には、帰藩を控えた森川許六を見舞う余裕が無かったのである。また出発を明後日に控えた五月四日には「与風うつしく書き出し候而散々見苦しく気の毒ニ存候。（中略）御帰国候而御あらため可被下候。書直し可申候。」（元禄六年五月四日付、許六宛芭蕉書）と書く始末となる。つまりは、御注文の懷紙を試作してみたものの散々の結末となったので申し訳ない、草稿しか贈れないため、御帰国の後にご自身で点検の上、ご返信下されば、こちらから書き直した原稿をお届けすると言うのである。そしていよいよ出立の五月六日、松尾芭蕉はやむなく、饞別の色紙・短冊・画賛の類を「次郎兵衛」に託して許六の住居まで届けることにした（『韻塞』『其詞』前書）。このとき松尾芭蕉の代理を務めた「次郎兵衛」は、松尾芭蕉の同居者「寿貞」の子で、元禄六年当時、ほぼ青年に達していた男子だ

という（校本芭蕉全集 第八巻 書簡編『三三一頁』）。

このとき森川許六が受領した「許六離別詞」は草稿には相違ないが、末尾には「風羅坊芭蕉述」という署名も「風羅」「鳳尾」という落款も押されていた。それを丁寧に模写したものが韻塞版「許六離別詞」である。その韻塞版「許六離別詞」を指標とすることで、全図譜版「許六離別詞」の仮名字遣いの個性を抽出することが出来る。

さて、次表2のように一仮名に複数の文字を併用する元禄の文字社会では、文字表記には独特の「揺らぎ」がある。1、一仮名一文字が常態化した表記（常用文字表記）、2、一仮名複数文字表記が常態化した表記（併用文字表記）、3、常用文字表記・併用文字表記の中間にあって人・時・場所によって常用または併用に変化する表記（両用文字表記）の三層の文字表記があり、中層に位置する両用文字が常用及び併用の方向に動くことで、文字表記に「揺らぎ」が生じるのである。またその両用仮名の「揺らぎ」の原因は、筆者が使用可能な複数の仮名字の文字の一つを基本仮名、残りを補助仮名と区分して使い分けるせいで、その使い分けに筆者固有の用字意識が表れる。

このためこの双方向性を備えた文字の「揺らぎ」を抽出してその特質を照合する事が出来れば、二文書の文字表記の近似性を検証することが出来る。具体的には、左記のように仮名字母表を作り、各仮名毎に基本仮名、補助仮名を照合した後、全図譜版「許六離別詞」の仮名字遣いの特徴を確認すればよい。仮に仲尾本『おくの細道』同様「春・登・丹・流」が多用されており、さらに助動詞「ず」（19例^注）、動詞「す」（47例）を表示する「す（春）」、助詞「と」を表示する「登」（79例）、助詞「に」を表示する「丹」（89例）、助動詞「る」「らる」「なる」「たる」の活用語尾を表示する「流」（9例^注）を多用していれば、両書はほぼ同

一筆者の文章だと見なして良いのである。

表2 全図譜版「許六離別詞」と中尾本『おくの細道』の仮名字母表

	許六離別詞	中尾本『おくの細道』
あ	安 5	安 120
い	以 3	以 59
う	宇 1	宇 36
え	衣 1	衣 20
お	於 1	於 40
か	可 14	可 312
き	幾 1	幾 80
く	計 1	久 63
け	己 10	気 31
こ		希 6
さ	左 4	己 106
し	之 16	加 6
す	寸 5	支 1
せ	世 2	具 3
そ	曾 4	遣 12
た	多 7	計 11
ち	知 1	介 10
つ	川 1	古 5
て	天 10	左 85
と	止 18	佐 1
な	奈 11	志 59
に	丹 15	志 77
ぬ	〇	春 77
ね	〇	勢 1
の	乃 19	楚 13
		能 2
		多 123
		知 23
		川 76
		天 373
		止 219
		堂 32
		津 1
		亭 1
		登 94
		那 14
		丹 117
		二 12
		奴 34
		年 15
		乃 527
		怒 11
		祢 3
		能 66

は	者 7	盤 4	ハ 4	者 113	盤 63	ハ 62	波 1
ひ	比 5	日 1		比 97	日 1	ヒ 1	
ふ	不 4	婦 4		不 76	婦 26		
へ	部 3			部 59	遍 6		
ほ	〇			本 25	保 6		
ま	末 3			末 86	万 3	満 1	
み	美 4	ミ 1		美 51	ミ 16		
む	無 1			武 36	無 1	舞 4	ム 1
め	女 2	免 2		女 37	免 5	メ 1	
も	毛 9			毛 151			
や	也 5			也 105			
ゆ	〇			由 23			
よ	与 1			与 63			
ら	良 3	梨 1		良 121	里 24	梨 4	リ 1
り	利 8	流 2		利 176	流 22	ル 18	類 6
る	留 8	連 2		留 182	連 53	レ 1	
れ	礼 8			礼 110	路 2		
ろ	呂 1			呂 17			
わ	王 2			王 21	和 9		
る	〇			為 1			
を	遠 16			遠 242	越 44	ヲ 6	
ゑ	〇			恵 2			
ん	〇			无 16			

漢字数 158字 36%
 字母数 279字 64%
 全字数 437字

まず、全図譜版「許六離別詞」（左）と中尾本『おくの細道』（右）の仮名字母表を掲げ、両者を比較する。

「許六離別詞」の漢字数は158字（36%）、仮名数は279字（64%）で、この漢字・仮名の比率は、中尾本の漢字4362字（42%）、仮名5979字（58%）に近似する。また「許六離別詞」に登場する仮名のすべてが中尾本『おくの細道』に登場する上、す（寸・春）、に（丹・尔）、む（無）の三文字（24字）を除くと、「許六離別詞」の基本仮名及び補助仮名は中尾本『おくの細道』の基本仮名・補助仮名と一致する。この仮名字使いの一致率は94%に達する。

一方、例外の六%に当たる、す（寸・春）、に（丹・尔）、む（無）の三字二四例には以下のような相違がある（注）。（上段、全図譜版「許六離別詞」、下段、中尾本『おくの細道』、数字は用例数）

○す（寸5・春3）	↓す（春77 寸41 ス31 須2）
○に（丹15・尔1）	↓に（尔201 丹117 耳86 仁64 ニ12）
○む（無1）	↓む（武36 無8 舞4 ム1）

この仮名字「す（寸・春）」の主・従関係は貞享期以降の松尾芭蕉の作品一般に見られるものながら、「す（春）」の使用率が高すぎる点に特異さが有る。ただし「す」（春77 寸41 ス31 須2）という中尾本の用字比率に比べれば、全図譜版の「春3」はまだ抑制が働いているケースとなる。

一方、「に」（丹15・尔1）の場合も、中尾本の「に」（尔201・丹117）に見る主・従関係は、貞享期以降の松尾芭蕉の作品一般に見られるものだが、「丹117」の使用比率が60%強と高すぎる。そして「許六離別詞」の「に」（丹15・尔1）では、その特異さがさらに拡張して、基本仮名・補助仮名の関係までが逆転している。その原因は、全図譜版の筆者が

「丹」を多用する書記習慣を持つ上に、彼が下敷きにした癸酉記行版の筆者、森川許六が「丹」を多用する人物だったためである（後述）。

なお、「許六離別詞」の「む」（無1）も、同時期の芭蕉作品の基本仮名が「武」、異体仮名が「無」であることに照らすと特異なものに見えるが、この該当箇所は「許六離別詞」三行目の文末装飾（注）に当たる。また用例1例であるため、この「無」を基本仮名とは見なしがたい。

四 「許六離別詞」の修辭法

次に、この仮名字遣いを修辭法として、「中尾本」の「す（春77 寸41）、と（登94 止219）、に」（丹117 尔201 耳86）、「る」（留182 流22）と比較すると、次のような修辭特性が付随している。

①す（寸7 春2）

・寸 なす 愛す 愛す なす なす もとめず
・春 なす あらず

中尾本では主として、助動詞「ず」および、動詞「す」を表示する「春」が、全図譜版「許六離別詞」では「春 なす あらず」とある。助動詞「ず」、動詞「す」各一例を表示している。

②と（止18 登5）

・止 ひとひ とふ 好と といへり まことや 恥と とつて
とつて 弟子と されども ことは たはぶれごと 侍しと
かや ミことは たとり もとめす もとめよと 同じと
・登 ことし ごとし そふると 力として もとめよと

中尾本では主に、助動詞「と」を表示する「登」が、全図譜版「許六離別詞」では「登 ことし ごとし そふると 力として もとめよと」

とあり、うち三例「そふると 力として もとめよと」で助詞を表示している。

③に（尔 1 丹 15）

・尔 道に

・丹 外に これに 歌に ものにも かりそめに 衆に 所に

微に 可感にや ふたつにして 二にして こゝろみに わ
かれに 深切に かりそめに

中尾本では主に助詞「に」を表示する「丹」が、全図譜版「許六離別詞」では基本仮名となり、「丹 外に これに 歌に 以下略」と幅広く利用されているが、大部分は助詞の「に」である。

④る（留 8 流 2）

・留 求たる そふる あはれなる あたなる

用る 見る ふるふ 一なる

・流 わかるゝ 幽遠なる

中尾本では主に助動詞「る」「らる」「なる」「たる」の活用語尾を示す「流」が、全図譜版「許六離別詞」では、「流 わかるゝ 幽遠なる」とある。「幽遠なる」の「幽遠」を名詞、「なる」を助動詞と見るなら、助動詞が一例あることになる。

以上、下地本文に集中する「中尾本」の「春・登・丹・流」の修辞法を「許六離別詞」と比較すると、「中尾本」の文字サンプルが豊富であるせいもあって、ほぼ全種の用例が検証される。また相違する六％（三字二四文字）の内、一字（一五文字）で全体の63％を占め、「許六離別詞」の個性の主因となる「に（丹）」は、基本仮名として利用されることで、結果的に所要の修辭的な用法を包含するものになっている。

五 「許六離別詞」の異体仮名遣い

ところで、異体仮名とは、基本仮名と一対で用いられる異体の仮名の意味で、大方の場合に制約なく用いられる基本仮名に対して、異体仮名は、類似語の音の区別、清濁の区別、同字反復の回避、語頭の指示等、修辭的な役割を担って補助的に用いられる（注10）。

主・従二種類の仮名文字を使い分ける用字意識が顕在化する松尾芭蕉筆画卷本『野ざらし紀行』（貞享三年秋成立）では、この両者の文字数はほぼ80対20の比率で利用され、中尾本『おくの細道』（元禄六年成立）では基本仮名三三〇五文字（82％^{注11}）、異体仮名五八一文字（18％）と基本仮名が若干増加する。

また中尾本『おくの細道』下地本文で四字三二〇例を占める「春・登・丹・流」の各異体仮名は、第二次推敲に当たる貼り紙本文では極端に減少している。

この減少を具体的に言えば、主として助動詞「ず」（19例）、動詞「す」（47例）を表示する「す（春）」、助詞「と」を表示する「登」（79例）、助詞「に」を表示する「丹」（89例）、助動詞「る」「らる」「なる」「たる」の語尾を表示する「流」（9例）が後退し、替わって「す（春）」は基本仮名「す（寸）」に、「と（登）」は基本仮名「と（止）」に、「に（丹）」は基本仮名「に（尔）」と補助仮名「に（耳）」とに整理、統合されたのである。

さて、次には、この事実を踏まえた上で全図譜版「許六離別詞」の仮名文字遣いを分析するために、韻塞版「許六離別詞」、癸酉記行版「許六離別詞」の仮名文字遣いととの相違部分を抽出する。（上段、韻塞版、中段、癸酉記行版、下段、全図譜版。以下同じ。表の末尾の数字は全図

譜版「許六離別詞」の該当語句のある行列番号。
表3 韻塞版、癸酉記行版と全図譜版との比較

韻塞版		癸酉記行版		全図譜版	
1、かりそめ丹	↓かりそめ丹	1、かりそめ丹	↓かりそめ丹	1	1
2、面越	↓面越	2、面越	↓面越	1	1
3、あハセ	↓あハセ	3、あハセ	↓あ者せ	1	1
4、深切丹	↓深切丹	4、深切丹	↓深切丹	2	2
5、別越	↓別越	5、別越	↓別遠	2	2
6、おし武	↓おし無	6、おし武	↓をし無	3	3
7、草扉越	↓草扉越	7、草扉越	↓草扉を	4	4
8、畫越好ム	↓画を好む	8、畫越好ム	↓畫を好	5	5
9、こゝ呂みル	↓こゝ路み丹	9、こゝ呂みル	↓こゝ呂み丹	6	6
10、とふ事あ李	↓とふ事有	10、とふ事あ李	↓とふ事有	6	6
11、好といへ里	↓好といへ利	11、好といへ里	↓好といへ利	7	7
12、風雅盤	↓風雅盤	12、風雅盤	↓風雅ハ	8	8
13、愛・といへ里	↓愛・といへ利	13、愛・といへ里	↓愛すといへ利	9	9
14、二にし天	↓二にし天	14、二にし天	↓二にし亭	10	10
15、用越	↓用越	15、用越	↓用遠	10	10
16、君子ハ	↓君子盤	16、君子ハ	↓君子盤	11	11
17、ふた津にし天	↓ふたつにし天	17、ふた津にし天	↓ふたつにし亭	12	12
18、可咸ルヤ	↓可咸丹ヤ	18、可咸ルヤ	↓可咸丹ヤ	13	13
19、晝はと徒て	↓晝はとつて	19、晝はと徒て	↓晝はとつて	13	13
20、風雅ハ	↓風雅盤	20、風雅ハ	↓風雅盤	14	14
21、弟子とな寸	↓弟子とな寸	21、弟子とな寸	↓弟子とな春	15	15
22、見流所ル	↓見流所丹	22、見流所ル	↓見留所丹	17	17
23、あらず	↓あらず	23、あらず	↓あらず	18	18
24、冬扇のとし	↓冬扇の古とし	24、冬扇のとし	↓冬扇のこ登し	19	19

25、衆丹さかひて	↓衆丹さかひて	25、衆丹さかひて	↓衆丹さかひて	19	19
26、用る所奈し	↓用る所奈し	26、用る所奈し	↓用る所那し	20	20
27、と者のミ	↓とばのミ	27、と者のミ	↓と者のみ	21	21
28、かりそ免ル	↓かりそ免丹	28、かりそ免ル	↓かりそ免丹	21	21
29、たハふ連	↓た者ふ礼	29、たハふ連	↓た者ふ連	22	22
30、あハ礼なる	↓あハ礼なる	30、あハ礼なる	↓あ者連なる	23	23
31、歌二實あり	↓歌丹實あり	31、歌二實あり	↓歌丹實あり	25	25
32、そふる止	↓そふる止	32、そふる止	↓そふる登	26	26
33、ミことは越	↓ミことはを	33、ミことは越	↓ミことはを	27	27
34、其細起	↓其細起	34、其細起	↓其細き	28	28
35、一筋越	↓一筋越	35、一筋越	↓一筋を	28	28
36、もと女す	↓もと女ず	36、もと女す	↓もと免す	30	30
37、求た流所	↓求たる所	37、求た流所	↓求堂る所	30	30
38、もと女よ止	↓もと免よ止	38、もと女よ止	↓もと女よ登	31	31
39、筆濃道・も	↓筆の道ルも	39、筆濃道・も	↓筆の道も	32	32
40、かゝ遣て	↓かゝ遣て	40、かゝ遣て	↓かゝ計て	33	33
41、柴門の外耳	↓柴門の外丹	41、柴門の外耳	↓柴門の外丹	34	34
42、王か流ゝのミ	↓和か流ゝのミ	42、王か流ゝのミ	↓王か流ゝのみ	34	34

- 1 網掛けは、常用表記になった文字。（異体仮名↓基本仮名）
- 2 非網掛けは併用表記になった文字。（基本仮名↓異体仮名）

さて、癸酉記行版「許六離別詞」と韻塞版「許六離別詞」とを比較すると、語句、仮名・漢字の配分、ひらがな・カタカナの使い分け、送り仮名の有無、字体・筆運びまで一致すべく、丁寧に書写されていることは既に述べた。しかしそれにも関わらず、この表3を見ると、最終的にいかなる仮名字母を採用するかは、編集者許六に任されていた形跡がある。

まずは、上記42箇所の異同カ所の36%を占める韻塞版の異体仮名が全図譜版で基本仮名に替わる例（表3 網掛け部）を取り上げて見よう。これは双方向性を持つ「文字の揺らぎ」の内の一方の変化で、推敲を重ねる度に異体仮名が抑制される松尾芭蕉の推敲作業の中では、これが基本的な変化に当たる。

2、5、7、15、33、35は同じく「越↓遠」の変化で、助詞「を」を表示する両用仮名「越・遠」を「遠」に統一する文字遣いの変化による。この変化は韻塞版・癸酉記行版には無いところから見て、原懐紙にも無かっただろう。また12「風雅盤」は、係助詞「は」に用いる専用仮名「盤」を基本仮名「ハ」に置き換えたもので、「畫盤何の為に……」「風雅ハ何の為に……」とが対句となるため、表記上でも「盤・ハ」と対照の妙を現す配慮となる（注1）。

残る11、19、34、40はいずれも自立語を強調表示する異体仮名が基本仮名に書き換えられた例に当たる。

次にはこれとは逆に、韻塞版が基本仮名を用い、全図譜版が異体仮名を用いる例（表3 非網掛け部）を取り上げてみる。

この仮名字体の変化は、「許六離別詞」の仮名文字の異同全体の63%（26例）を占める。これは異同する仮名の過半数（63%）で併用仮名が用いられる傾向を示し、また「春・登・丹・流」の各異体仮名が多い点でも注目に値する。

この文字の特性を目立たせるために、先ずこの中から中尾本『おくのほそ道』で顕著に利用された「春・登・丹・流」を拾うと、次の15例となる。

韻塞版	癸酉記行版	全図譜版
丹 1、かりそめ丹	↓ かりそめ丹	↓ かりそめ丹
		1

4、深切ル	↓ 深切丹	↓ 深切丹	2
9、こゝ呂みル	↓ こゝ路み丹	↓ こゝ呂み丹	6
18、可咸ルヤ	↓ 可咸丹ヤ	↓ 可咸丹ヤ	13
22、見流所ル	↓ 見流所丹	↓ 見留所丹	17
25、衆ルさかひて	↓ 衆丹さかひて	↓ 衆丹さかひて	19
28、かりそ免ル	↓ かりそ免丹	↓ かりそ免丹	21
31、歌二實あり	↓ 歌丹實あり	↓ 歌丹實あり	25
41、柴門の外耳	↓ 柴門の外丹	↓ 柴門の外丹	34
登			
24、冬扇の古し	↓ 冬扇の古とし	↓ 冬扇のこ登し	19
32、そふる止	↓ そふる止	↓ そふる登	26
38、もと女よ止	↓ もと免よ止	↓ もと女よ登	31
春			
21、弟子とな寸	↓ 弟子とな寸	↓ 弟子とな春	15
23、あら寸	↓ あら寸	↓ あら春	18
この15文字は「許六離別詞」の中で変化する仮名文字全体の36%を占めている。これは明らかに中尾本『おくの細道』的な文字の「揺らぎ」である。			
次には、左記の15文字を除外して、二回以上繰り返される仮名文字の異同を取り上げる。			
16、君子ハ	↓ 君子盤	↓ 君子盤	11
20、風雅ハ	↓ 風雅盤	↓ 風雅盤	14
14、二にし天	↓ 二にし天	↓ 二にし亭	10
17、ふた津にし天	↓ ふたつにし天	↓ ふたつにし亭	12

3、あハセ	↓あハセ	↓あ者セ	1
29、たハふ連	↓た者ふ礼	↓た者ふ連	22
30、あハ礼なる	↓あハ礼なる	↓あ者連なる	23
16「君子ハ↓君子盤」、20「風雅ハ↓風雅盤」は、汎用仮名の「ハ」を係助詞「は」の専用仮名「盤」に替えて、係助詞「は」である（従って「わ」と読む）ことを明示したもの。14「二にし天↓二にし亭」17「ふた津にし天↓ふたつにし亭」は、接続助詞「て（天）」と「して（し亭）」とを識別する表示。天理本『おくのほそ道』では「して」19例は全て「し天」だが、中尾本『おくの細道』では1例「し亭」と書いた例がある。3「あハせ↓あ者セ」、29「たハふ連↓た者ふ連」、30「あハ礼なる↓あ者連なる」は、汎用仮名「ハ」を「者」に替えて「わ」と読むことを示唆した文字遣いか。			
なお「わかれ」を「王かれ」と書く文字遣いは、全図譜版、韻塞版に共通で、次の通り「わ」二例はいずれも「王」と書かれている。（上段、韻塞 中段、癸酉記行版、下段、全図譜版）			
○ 王かれ丹	↓和かれ丹	↓王かれ丹	3
42、王か流ゝのミ↓和か流ゝのミ		↓王か流ゝのみ	34
ちなみに中尾本『おくの細道』のこの仮名の文字遣いは、「わ」「王」21例、和9例で、中尾本、全図譜版ともに「わ（王）」を基本仮名とすることが分かる。			
ところで、これらの異体仮名の使用に関して興味深いのは、濁音表示の仮名である。			
27、ミ者 ^ミ のミ	↓ミ者 ^ミ のミ	↓ミ者 ^ミ のみ	21
33、ミミ者越	↓ミミ者 ^ミ を	↓ミミ者 ^ミ を	27
27「ミ者」を癸酉記行版で「ミば」と書くのは、「者」と書き「わ」と読むことが多い「許六離別詞」の文字遣いの中で読みの正確さを確保するための文字の手直しだろう。また33「ミミ者越」は、実は「され者このミミ者 ^ミ を」と書くことで同字反復の文脈で、癸酉記行版は「さればこのミミ者 ^ミ を」と書くことと同字反復を回避している。一方、全図譜版は「され者このミミ者 ^ミ を」と濁音の「ば」を「者」で統一したもので、この整理意識にはこの筆者固有の根拠がある。中尾本『おくの細道』の文字遣いでは、濁音「ば」は「ハ8例」「者62例」の比率で表示されるので、「され者このミミ者 ^ミ を」と書くことは自然な書き方になる。			
また次の濁音表記にも似通った事情がある。（上段、癸酉記行版、下段、全図譜版）			
23、あら寸	↓あら寸	↓あら春	18
24、冬扇のとし	↓冬扇の古とし	↓冬扇のこ登し	19
40、かゝ遣て	↓かゝ遣て	↓かゝ計て	33
23「あら寸↓あら春」は基本仮名「寸」を異体仮名「春」に置き換えて打消しの助動詞「ず」を表示したもので、これは中尾本では19例あるが、天理本では例の無い文字遣いである。また24「冬扇のとし↓冬扇の古とし↓冬扇のこ登し」は、略字の「とし」を正字の「古とし」「こ登し」に書き換えたもので、中尾本『おくの細道』に照らすと、濁音「こ」の表記は17例すべてが「こ（已）」である。一方「古」は「こころ」「こち」のような心の関連語彙に配置されている。さらに40「かゝ遣て↓かゝ計て」は芭蕉愛用の異体仮名「遣」を同じく異体仮名「計」に置き換えたもので、中尾本『おくの細道』では、濁音「げ（計）」は「計5例・気6例・希2例」で表記され、「遣」が濁音表示に用いられることはない。			

六 終わりに

以上、取り纏めて言うと、中尾本『おくの細道』の下地本文に集中する「春・登・丹・流」^{〔註〕}を手掛かりに、近似した文字遣いのテキスト「許六離別詞」を選別し、両書の用字差、修辭差、字体差、くずし差、運筆差を比較する作業を行ない、今回、用字差、修辭差の分析を終了した。

結論として、元禄六年四月末に江戸で執筆された「許六離別詞」^{（きりくつりふのこ）}の筆跡は中尾本『おくの細道』の筆跡に近似する。先に分析したとおり、12箇所の表現の異同からみると、それは韻塞版から全図譜版に至る過程で脱字を補う、表記を揃える等の整理の手が加わったものと判断された。また韻塞版「許六離別詞」と癸酉記行版「許六離別詞」とは、その字面と文字遣いが別人にしては似すぎており、後者が前者を模写して出来たという通説は肯首される。また両書の仮名文字の異同を観察すると、中尾本『おくの細道』の特徴である「春・登・丹・流」の仮名文字の異同は少数で、如上の四文字を使って、助詞を頻繁に強調表示する事例も少ない。つまり元禄六年五月六日、森川許六が松尾芭蕉から受領した韻塞版「許六離別詞」には、中尾本『おくの細道』の筆者の用字特性は見当たらない。

一方、全図譜版「許六離別詞」には、「春・登・丹・流」の異体仮名を多用する、助詞を進んでこの異体仮名で書くなど、中尾本『おくの細道』と共通する文字遣いが観察される。また助動詞「ず」を表示する「23、あら寸↓あら春」の書き換え、さらに汎用仮名「ハ」を表示する「3、あハせ↓あ者せ（全図譜）」の書き換え、加えて濁音を表示する「24、とし↓こ登し」や「31、か↓遣て↓か↓計て」の書き換えには、

中尾本『おくの細道』の筆者の文字遣いの特性が反映している。したがって、韻塞版「許六離別詞」と全図譜版「許六離別詞」とは別人の筆で書かれた作品と見なされる。

韻塞版「許六離別詞」の署名「風羅坊芭蕉述」の「述」が落ち、かつ「風羅」「鳳尾」の落款がないこと、並びにこれらの文字遣いの特徴から見て、全図譜版「許六離別詞」は、韻塞版「許六離別詞」の下敷きになった松尾芭蕉の直筆ではない。したがって、この「許六離別詞」との筆跡並びに文字遣いの類似性は、中尾本『おくの細道』が元禄六年松尾芭蕉の手で執筆されたことの根拠にはならない。

注

注1 使用したデータベースはインターネット上に公開されている。URLは「<http://138.67.9.141>」である。WWW対応型のデータベースを編成するに当たっては、データベースの躯体部を「Visual dBASE 7」（Borland社）に変更し、同社の「IntraBuilder」をプラットフォームとして利用した。

注2 天理図書館蔵。図版の引用は、『諸本対照芭蕉俳文句文集』（弥吉菅一、赤羽学他著、四八四頁）所収「許六離別の詞」参照。

注3 この点については、「本文も多少許六の手入れが指摘される。「たどりうしなふる」を「たどりうしなふ」に改めたのは、文法の正確を期したものであるが、芭蕉の筆勢がそがれる結果となった。」（『諸本対照芭蕉俳文句文集』弥吉菅一、赤羽学他著、四八九頁）という理解もある。

注4 『芭蕉全図譜』『許六離別詞解説』には、『癸酉記行』『許六離別詞』の下書きとの見解が示されている。なお、全図譜版には次に一例、訂正箇所が韻塞版と一致する例があるが、その他3例が踏襲されなかったために結果的に一致したものと判断した。

2、別をおしむ↓別をおしむ↓別をしむ^お

（全図譜）

注5 今『芭蕉全図譜』からこれに該当する署名を抜き出すと、次のようなものがある。（Noは作品ナンバー）

- ・元禄三仲秋日 芭蕉自書（『幻住庵記』No.472）
- ・芭蕉自画（「山吹や」自画賛No.256）
- ・芭蕉庵桃青書（「会式」No.299）
- ・優婆塞芭蕉拜書（「南无当来導師」一行物 No.306）
- ・芭蕉翁書（「守口如瓶」一行物、No.307）
- ・元禄辛未歳五月下弦、雲竹書（猿蓑、「其角序」）

注6 各異体仮名で書かれる単語の内訳を分類して示すと、次のようになる。

表1ーす（春）の品詞別分布

単語	品詞	用例数
ず	助動詞	19
す	動詞	50
その他	副詞	1
その他	名詞	6

表2ーと（登）の品詞別分布

単語	品詞	用例数
と	助動詞	72
など	助動詞	8
ごとし	助動詞	8
その他	副詞	3
その他	名詞	3

表3ーに（丹）の品詞別分布

単語	品詞	用例数
に	助動詞	79
にて	助動詞	8
なり	助動詞	14
その他	副詞	13

表4ーる（流）の品詞別分布

単語	品詞	用例数
る	助動詞	9
つつがなし	形容詞	1
その他	動詞	5
その他	形容動詞	4
その他	連体詞	2

注7 注6の表4の通りである。単純に数えると、「る（助動詞）」は9例だが、元禄時代の俳諧師の文法知識では形容動詞4例も名詞+助動詞のかたちで区分けされていた可能性がある。その場合は助動詞は9例+4例となる。

注8 なお、ここに言う「許六離別詞」の「す」（寸5・春3）とは、「す」は基本仮名「寸、5例」、異体仮名「春、3例」が用いられていることを意味する。この俳文の仮名の用例数の全体は本文中の「字母数表」参照。また中尾本『おくの細道』の仮名文字利用の全体も、本文中の仮名字母表を参照して頂きたい。

注9 文末装飾は文末に異体仮名を用いて、書写の際に文末・文頭を識別する便宜を図る文字遣いという。読解の際の目印とも成る。癸酉記行版の文末と韻塞版の文末とを比較すると、文末にかなり多く異体仮名が使われている。特に全図譜版「許六離別詞」は比較的装飾的な文字遣いのテキストで、文末装飾についても、3行目「をし無」、一〇行目「一な梨」、一五行目「弟子とな春」、一八行目「所にあら春」などに異体仮名を用いた装飾表示が確認される。

注10 一仮名を表記するために併用される仮名字体は大方、ほぼ八対二の割合で分布する。このため各仮名字体の使用率を調べ、使用率二〇%以下の仮名字体を抽出すると、装飾的な仮名字遣いの全容を把握することが出来る。そこでその手法を応用して調査した。基本仮名・異体仮名の使用区分について

は、『日本語書記史原論』第三章藤原定家の文字遣（小松英雄著、笠間書院刊）以下、最近の仮名文字遣いの研究を参照されたい。

注11 隣接して頻繁に使われる格助詞「の」のような文字に「の・乃・能・濃・農」のような複数の文字が併用されることを「隣接回避」の仮名文字遣いという。この隣接回避には、

1、同じ行列の前後の隣接

2、連接行を含めた左右の文字の隣接

3、対句を視野に入れた詞句の隣接回避
という3種類がある。

注12 「る」については次の通り「流↓留」の例だけがある。

22、見流所ル ↓見流所丹 ↓見留所丹 17

38、求た流所 ↓求たる所 ↓求堂留所 31

注13 「中尾本『おくの細道』の用字特性（上）」参照（『人文論叢』2002年3月、三重大学人文学部刊）。